

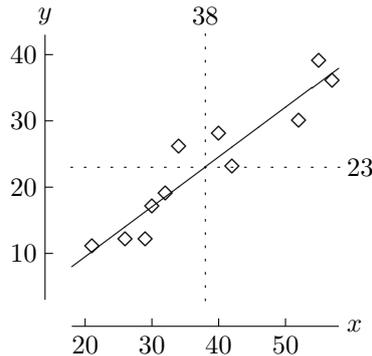
## 6 回帰直線

### 6.1 回帰直線

次のデータは種目 X の記録  $x$  (kgw) と種目 Y の記録  $y$  (m) である。

$x$	21	26	29	30	32	34	40	42	52	55	57
$y$	11	12	12	17	19	26	28	23	30	39	36

散布図上で、誤差が最小となるように引いた直線のことを回帰直線という。



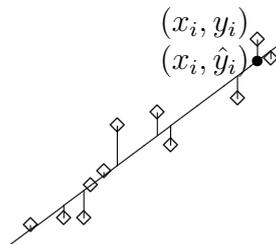
回帰直線の方程式を回帰式 ( $y$  の  $x$  への回帰式) という。

$$\hat{y} = a + bx \quad (1)$$

回帰式 (1) において、 $a$  を回帰定数、 $b$  を回帰係数という。また  $x$  を説明変数、 $y$  を被説明変数または目的変数という。説明変数の値  $x_i$  に対して回帰式 (1) から求めた値  $\hat{y}_i = a + bx_i$  のことを回帰値という。

**最小二乗法 (least squares method)** 観測値  $y_i$  と回帰値  $\hat{y}_i$  の差を残差または誤差という。残差を  $e_i$  とおく。

$$e_i = y_i - \hat{y}_i = y_i - a - bx_i$$



残差平方和を  $S(a, b)$  とおく<sup>\*1</sup>。最小二乗法とは、残差平方和が最小となるように<sup>\*1</sup> 定数  $a$ 、 $b$  を定める手法のことである。

$$S(a, b) = \sum_{i=1}^n e_i^2 = \sum_{i=1}^n (y_i - a - bx_i)^2$$

<sup>\*1</sup>残差  $e_i$  の 2 乗の総和を残差平方和 (RSS; Residual sum of squares) という。

## 6.2 回帰式の導出

残差平方和  $S(a, b)$  を  $a, b$  について整理し、最小二乗解を求める。

$$\begin{aligned}
 S(a, b) &= \sum (y_i - a - bx_i)^2 \\
 &= \sum \{ \bar{y} - a - b\bar{x} + (y_i - \bar{y}) - b(x_i - \bar{x}) \}^2 \\
 &= \sum (\bar{y} - a - b\bar{x})^2 + \sum \{ (y_i - \bar{y}) - b(x_i - \bar{x}) \}^2 \\
 &\quad + 2(\bar{y} - a - b\bar{x}) \sum \{ (y_i - \bar{y}) - b(x_i - \bar{x}) \}
 \end{aligned} \tag{*}$$

\*ii 偏差の総和は0なので \*ii, (\*) の項は0になる。

$$\begin{aligned}
 S(a, b) &= \sum (\bar{y} - a - b\bar{x})^2 + \sum \{ (y_i - \bar{y}) - b(x_i - \bar{x}) \}^2 \\
 &= \sum (\bar{y} - a - b\bar{x})^2 + b^2 \sum (x_i - \bar{x})^2 \\
 &\quad - 2b \sum (x_i - \bar{x})(y_i - \bar{y}) + \sum (y_i - \bar{y})^2 \\
 &= n(\bar{y} - a - b\bar{x})^2 + b^2 ns_x^2 - 2bns_{xy} + ns_y^2
 \end{aligned}$$

\*iii 残差平方和  $S(a, b)$  は次のように変形できる。ただし  $s_x^2 > 0$  とする。 \*iii

$$S(a, b) = n(\bar{y} - a - b\bar{x})^2 + ns_x^2 \left( b - \frac{s_{xy}}{s_x^2} \right)^2 + n \frac{s_x^2 s_y^2 - s_{xy}^2}{s_x^2}$$

一般に、平方数は負になることはない ( $X^2 \geq 0$ ) から、残差平方和  $S(a, b)$  の最小値は  $n(s_x^2 s_y^2 - s_{xy}^2) / s_x^2$  で、それが最小となるのは  $\bar{y} - a - b\bar{x} = 0$  かつ  $b - s_{xy} / s_x^2 = 0$  のときである。回帰式 (1) において  $a, b$  は次の値となる。

$$b = \frac{s_{xy}}{s_x^2}, \quad a = \bar{y} - b\bar{x} \tag{2}$$

回帰直線と点  $(\bar{x}, \bar{y})$  回帰式 (1), (2) から、 $\hat{y} = (\bar{y} - b\bar{x}) + bx$  となるから、

$$\hat{y} - \bar{y} = \frac{s_{xy}}{s_x^2} (x - \bar{x}) \tag{3}$$

と表せる。この (3) 式の形から、回帰直線は必ず点  $(\bar{x}, \bar{y})$  を通る。

\*ii  $\sum (x_i - \bar{x}) = \sum x_i - \sum \bar{x} = n\bar{x} - n\bar{x} = 0$

\*iii  $s_x^2 = 0$  のときは、最小二乗解  $a, b$  が定まらない。

### 6.3 回帰直線の求め方

回帰直線の求め方 (1) 上のデータに対して回帰式  $\hat{y} = a + bx$  と、すべての回帰値  $\hat{y}_i$  を求める。

変数	$x$	$y$	$x - \bar{x}$	$y - \bar{y}$	$(x - \bar{x})^2$	$(y - \bar{y})^2$	$(x - \bar{x})(y - \bar{y})$	$\hat{y}$
a.	<b>21</b>	<b>11</b>	-17	-12	289	144	204	<b>10.25</b>
b.	<b>26</b>	<b>12</b>	-12	-11	144	121	132	<b>14.00</b>
c.	<b>29</b>	<b>12</b>	-9	-11	81	121	99	<b>16.25</b>
d.	<b>30</b>	<b>17</b>	-8	-6	64	36	48	<b>17.00</b>
e.	<b>32</b>	<b>19</b>	-6	-4	36	16	24	<b>18.50</b>
f.	<b>34</b>	<b>26</b>	-4	3	16	9	-12	<b>20.00</b>
g.	<b>40</b>	<b>28</b>	2	5	4	25	10	<b>24.50</b>
h.	<b>42</b>	<b>23</b>	4	0	16	0	0	<b>26.00</b>
i.	<b>52</b>	<b>30</b>	14	7	196	49	98	<b>33.50</b>
j.	<b>55</b>	<b>39</b>	17	16	289	256	272	<b>35.75</b>
k.	<b>57</b>	<b>36</b>	19	13	361	169	247	<b>37.25</b>
合計	418	253	0	0	1496	946	1122	253
平均	38	23	0	0	136	86	102	23

平均, 分散, 共分散は,

$$\bar{x} = 38, \quad \bar{y} = 23, \quad s_x^2 = 136, \quad s_{xy} = 102$$

回帰係数  $b$ , 回帰定数  $a$  は,

$$b = \frac{s_{xy}}{s_x^2} = \frac{102}{136} = 0.75, \quad a = \bar{y} - b\bar{x} = 23 - \frac{102}{136} \cdot 38 = -5.5$$

なので, 回帰式  $\hat{y} = a + bx$  は次のとおり。または  $\hat{y} - \bar{y} = b(x - \bar{x})$  でもよい。

$$\hat{y} = -5.5 + 0.75x, \quad \hat{y} - 23 = 0.75(x - 38)$$

$x_1 = 21$  に対応する回帰値は  $\hat{y}_1 = 10.25$  である (他の回帰値も同様にする)。

$$\hat{y}_1 = -5.5 + 0.75 \cdot 21 = 10.25$$

回帰値の平均値 回帰式 (1), (2) と, 平均値の性質から,

$$\bar{\hat{y}} = a + b\bar{x} = (\bar{y} - b\bar{x}) + b\bar{x} = \bar{y}$$

が成り立つので, 回帰値の平均値  $\bar{\hat{y}}$  は観測値の平均値  $\bar{y}$  に等しい。

$$\bar{\hat{y}} = \bar{y} \tag{4}$$

回帰直線の求め方 (2) 回帰式  $\hat{y} = a + bx$  は次のように求めることもできる。

変数	$x$	$y$	$x^2$	$y^2$	$xy$	$\hat{y}$
a.	<b>21</b>	<b>11</b>	441	121	231	<b>10.25</b>
b.	<b>26</b>	<b>12</b>	676	144	312	<b>14.00</b>
c.	<b>29</b>	<b>12</b>	841	144	348	<b>16.25</b>
d.	<b>30</b>	<b>17</b>	900	289	510	<b>17.00</b>
e.	<b>32</b>	<b>19</b>	1024	361	608	<b>18.50</b>
f.	<b>34</b>	<b>26</b>	1156	676	884	<b>20.00</b>
g.	<b>40</b>	<b>28</b>	1600	784	1120	<b>24.50</b>
h.	<b>42</b>	<b>23</b>	1764	529	966	<b>26.00</b>
i.	<b>52</b>	<b>30</b>	2704	900	1560	<b>33.50</b>
j.	<b>55</b>	<b>39</b>	3025	1521	2145	<b>35.75</b>
k.	<b>57</b>	<b>36</b>	3249	1296	2052	<b>37.25</b>
合計	418	253	17380	6765	10736	253
平均	38	23	1580	615	976	23

平均は  $\bar{x} = 38$ ,  $\bar{y} = 23$  である。分散, 共分散は,

$$s_x^2 = 1580 - 38^2 = 136, \quad s_{xy} = 976 - 38 \cdot 23 = 102$$

回帰係数  $b$ , 回帰定数  $a$  は,

$$b = \frac{s_{xy}}{s_x^2} = \frac{102}{136} = 0.75, \quad a = \bar{y} - b\bar{x} = 23 - \frac{102}{136} \cdot 38 = -5.5$$

なので, 回帰式  $\hat{y} = a + bx$  は次のとおり。または  $\hat{y} - \bar{y} = b(x - \bar{x})$  でもよい。

$$\hat{y} = -5.5 + 0.75x, \quad \hat{y} - 23 = 0.75(x - 38)$$

回帰直線の求め方 (3) 「回帰直線の求め方 (2)」の表を利用すると, 平均は  $\bar{x} = 418/11 = 38$ ,  $\bar{y} = 253/11 = 23$  である。分散, 共分散は,

$$s_x^2 = \frac{11 \cdot 17380 - 418^2}{11^2} = \frac{16456}{11^2}, \quad s_{xy} = \frac{11 \cdot 10736 - 418 \cdot 253}{11^2} = \frac{12342}{11^2}$$

回帰係数  $b$ , 回帰定数  $a$  は,

$$b = \frac{n^2 \cdot s_{xy}}{n^2 \cdot s_x^2} = \frac{12342}{16456} = 0.75, \quad a = \bar{y} - b\bar{x} = 23 - \frac{12342}{16456} \cdot 38 = -5.5$$

なので, 回帰式  $\hat{y} = a + bx$  は次のとおり。または  $\hat{y} - \bar{y} = b(x - \bar{x})$  でもよい。

$$\hat{y} = -5.5 + 0.75x, \quad \hat{y} - 23 = 0.75(x - 38)$$

## 6.4 微分係数と極値

1 変数関数の極小点 関数  $y = f(x)$  は微分可能で、導関数  $f'(x)$  は連続とする。

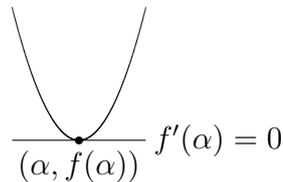
$$f'(x) = \frac{d}{dx}f(x) = \lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(x+h) - f(x)}{h}$$

導関数を求めるための幾つかの公式が知られている。

$$(x^2)' = 2x, \quad \{(g(x))^2\}' = 2(g(x)) \times g'(x)$$

極小点とは、その近傍において最小となる点のことである。微分係数  $f'(\alpha)$  は点  $(\alpha, f(\alpha))$  における接線の傾きを表し、極小点に関して次の命題が成り立つ。

$$f(x) \text{ が } x = \alpha \text{ で極小} \implies f'(\alpha) = 0$$



2 変数関数の極小点 2 変数関数  $z = f(x, y)$  は偏微分可能で、偏導関数  $f_x(x, y)$ ,  $f_y(x, y)$  は連続とする。

$$f_x(x, y) = \frac{\partial}{\partial x}f(x, y) = \lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(x+h, y) - f(x, y)}{h}$$
$$f_y(x, y) = \frac{\partial}{\partial y}f(x, y) = \lim_{k \rightarrow 0} \frac{f(x, y+k) - f(x, y)}{k}$$

次の命題が成り立つ。

$$f(x, y) \text{ が } x = \alpha, y = \beta \text{ で極小} \implies f_x(\alpha, \beta) = f_y(\alpha, \beta) = 0$$

## 6.5 偏微分法による回帰式の導出

被説明変数を 1 個の説明変数で表した式のことを単回帰式という<sup>\*iv</sup>。単回帰式<sup>\*iv</sup>は回帰直線を作る。単回帰式を  $\hat{y} = a + bx$  とし、残差平方和を  $S(a, b)$  とおく。

$$S(a, b) = \sum_{i=1}^n (y_i - \hat{y}_i)^2 = \sum_{i=1}^n (y_i - a - bx_i)^2$$

<sup>\*iv</sup>被説明変数を 2 個以上の説明変数で表した式のことを重回帰式という。

正規方程式 残差平方和  $S(a, b)$  を偏微分し，最小二乗解を求める。

$$\begin{aligned}S_a(a, b) &= -2 \sum (y_i - a - bx_i) = 0 \\S_b(a, b) &= -2 \sum x_i (y_i - a - bx_i) = 0\end{aligned}$$

回帰定数  $a$ ，回帰係数  $b$  は次の連立方程式を満たす。これを正規方程式という。

$$\begin{aligned}\sum (y_i - a - bx_i) &= 0 \\ \sum x_i (y_i - a - bx_i) &= 0\end{aligned}$$

単回帰式の導出 正規方程式をデータの大きさ  $n$  で割り，平均値の式で表す。

$$\bar{y} - a - b\bar{x} = 0 \tag{i}$$

$$\overline{xy} - a\bar{x} - b\overline{x^2} = 0 \tag{ii}$$

(ii) から (i)  $\times \bar{x}$  を引き，文字  $a$  を消去する。

$$\overline{xy} - \bar{x}\bar{y} - b(\overline{x^2} - \bar{x}^2) = 0$$

$s_{xy} = \overline{xy} - \bar{x}\bar{y}$ ， $s_x^2 = \overline{x^2} - \bar{x}^2$  を用いると，次の公式が得られる。

$$\hat{y} = a + bx, \quad b = \frac{s_{xy}}{s_x^2}, \quad a = \bar{y} - b\bar{x} \tag{5}$$

## 本稿の参考文献

- 統計学入門 (基礎統計学)  
東京大学教養学部統計学教室 (編) 東京大学出版会 978-4-13-042065-5
- 統計学  
久保川 達也 (著) 東京大学出版会 978-4-13-062921-8
- はじめての統計学  
道家 暎幸 (共著) コロナ社 978-4-339-06113-0
- 確率統計 新版 (新版数学シリーズ)  
岡本 和夫 (ほか著) 実教出版 978-4-407-32171-5
- 統計学序論 改訂版  
山本 義郎 (著) 東海大学出版部 978-4-486-02133-9
- 確率統計 (高専テキストシリーズ)  
上野 健爾 (監修) 森北出版 978-4-627-05561-2
- 基本統計学 第4版  
宮川 公男 (著) 有斐閣 978-4-641-16455-0
- 新統計入門  
小寺 平治 (著) 裳華房 978-4-7853-1099-8
- Schaum's Outline of Introduction to Probability and Statistics  
Seymour Lipschutz (著) McGraw-Hill Education 978-0-07-176249-6
- A Dictionary of Statistics  
Graham Upton (著) Oxford Univ Pr 978-0-19-967918-8
- [www5e.biglobe.ne.jp/~emm386/statistics/](http://www5e.biglobe.ne.jp/~emm386/statistics/)